

所得格差による教育環境と外国語教育の実態

前ボゴタ日本人学校 校長

岩手県胆沢郡金ヶ崎町立金ヶ崎中学校 校長 佐藤 孝

キーワード：現地理解，学校格差，教育実態，外国語指導

1. はじめに

コロンビアは中米のパナマ，南米ベネズエラ，ペルー，チリ，エクアドル，ブラジルと国境を接し，カリブ海，太平洋の2つの大海とも接している。面積は日本の4倍であり，人口は4500万人を抱える。主産業は農業であり，農産物の輸出国でもある。また，石油や他の鉱物資源に恵まれている。平均的な経済力レベルの人々の生活環境は日本とほぼ同程度である。経済は北米，生活や文化はスペインをはじめとするヨーロッパの影響が強く，南米のアテネと言われるほどその程度も高いと思われる。首都のボゴタは標高2600 mの高地にあり，人口800万人を数える国際都市である。

コロンビアは所得格差が大きく保護者の所得格差が8段階あると言われている。また，その格差がそのまま児童・生徒の教育に直結すると言われている。その中で児童・生徒がどのように日々学習し生活しているか，その格差が施設設備の面で，どの程度のものでその中で教職員にどのように日々の授業に取り組んでいるのかを見聞すると共に，現地校での授業を実施体験することによって現地理解教育の一助にすることを目的とした。なお，低所得者層の1～2レベルの学校はやや危険が予想されるため，公立，国立小中学校，インターナショナル校の実態に焦点をあてた。

2. 訪問校の概要

(1) Instituto Renato Descartes

(レナート・デスカルテス校)

当校はボゴタ南部に位置し，中程度の貧困地区にある公立学校である。コロンビアでは経済的に言うと平均を下回る公立学校だと思われる。児童・生徒は幼稚部を含め200名程の学校である。

(2) Instituto Pedagogico Nacional

(ペダゴヒコ大学附属国立学校)

ボゴタ市内北部に位置し，幼稚部から高等部まであり，児童・生徒1900名が通学している。通学はバス，自家用車が主である。保護者の所得は高い。

(3) Ingraterra International

(イングラテラ インターナショナル校)

ボゴタ北部に位置し英国教育過程のバイリンガル校である。成績優秀者は英国大学への留学ができる仕組みがあり，校長は英国人である。日本人学校との交流も長く，毎年文化交流を行っている。今後はクラブ活動交流も計画されている。

保護者の所得階層では最上位に位置する。入学は経済的に高いことと英語がネイティブに近い能力が条件となる。児童・生徒はエリート意識が強いが，身につけている学力も高い。

3. 施設設備の違いについて

レナートデスカルテス校では教科書は学校に備え付けられているが人数分はない。児童・生徒は教科書を2人ー

組で使用している。視聴覚機器、図書関係設備はほとんど無く、パソコン等は校長室、事務室、職員室に1台ずつ設置されているだけである。児童・生徒用はタイプライターがパソコンのキーボード練習用として40台設置されているのみである。校庭は無いため、狭い中庭でボール遊びや体育を行っている。

ペダゴヒコ校では教科書はそれぞれが持っており、パソコン等の設備が充実している。図書館にはあらゆる蔵書、学習室も日本レベル以上である。体育館、校庭は2000名が活動するに十分な広さである。また、専用劇場があり、外部から演奏家を招聘し様々な催事が行われている。カフェテリアが充実しており、児童・生徒の昼食は自分で食べたいものをここで食べる。

イングラテラ校では幼・小・中・高校生が一緒に学ぶため広大な敷地が用意され、教育環境は申し分ない。前述のペダゴヒコ校より大きな施設・設備である。文化活動の催事場も設置されており日本の大学に匹敵するような規模の施設設備である。周囲は大学等の文教施設地帯にあり、安全も確保されている。課外クラブ等も充実しており、希望選択により放課後に活動できる。クラブのみの担当教師が配置されている。

4. 児童・生徒の授業への取り組み、教職員の取り組みについて

レナートデスカルテスでは授業参観、校長や教職員との話を主として行った。授業では母語スペイン語の読み書き、キリスト教的モラル向上を教育の中心としているが、教育目標の重要事項の中には保護者との連携、国際理解、自己実現等があり、目標とするものには日本との違いはあまりないように思われた。

教職員は教育に情熱を傾けていることが話し合いの中で随所に見られた。保護者は低所得者が多く、諸教材費、バス代が支払えないため不登校に陥る児童・生徒も多くいる。昼食は持参が原則であるが、近所の物による寄付等でまかなう場合も多い。児童・生徒の経済的理由で昼食を食べられないという問題もあるため、教職員は児童・生徒一人ひとりに丁寧接する必要がある、不登校等があればすぐにカウンセリング体制をとり、家庭訪問なども頻繁に行っているとのことである。児童・生徒の所得格差に強い悩みを抱えていた。施設・設備の貧弱にもめげず児童・生徒は活発で挨拶も立派であった。授業も積極的に受けていた印象がある。何より、このような環境において校長の教育に対する情熱と子ども達に対する愛情は私自身校長として敬服の至りであった。

ペダゴヒコ校では授業参観と授業、教員との話し合いを主として行った。熱心に学習する姿が随所に見られた。小学1年生から英語を学習していたが、小学部で学年があがるにつれ、好き嫌いが出てくるためか、一部は授業姿勢も消極的になりがちであった。中学生は1学級あたりの人数(35～40名)が多いためか、集中できない生徒も見られた。英語の授業を1時間もらい、「日本文化」と「私の故郷」についてという題材で授業(中2)を実施した。

- ① ボゴタの特徴や自慢する部分を数名の生徒に発表。
- ② 日本について知っていることを挙手により発表。
- ③ 発表された話題に絞って日本の説明。(自動車、家電製品、家族、友達、学校の様子等)

多くの生徒は日本の生活、文化等多くのことに興味を持っていた。彼らは日本に対して具体的知識を持っているわけではないが、ボゴタにある日本製品を通して日本をイメージしていた。日本の地方について理解させることはなかなか困難であったが、ひらがなやカタカナについての質問が多く出された。

授業終了後に生徒全員が私の周りに集まり、自分の名前をカタカナで書いてくれとたのまれ、日本文化への関心の深さに驚かされた。英語の能力は小学校から学習しているためか日本のレベルよりも高いと感じた。

残念なことに年間指導計画は準備されていなかったが、教材は充実していた。教職員には教師一人一人に教官室があり、教師間の連携も十分にとれているようであった。他の学校と比較して余りにも生徒の質と環境が良いため、教師自身の転勤希望はほとんど出さないとのことである。

生徒指導などの問題は日本と同じような問題(非社会的問題、反社会的問題)を抱えており、カウンセラーとの連携が欠かせないとのことである。最も印象的な問いとして、「日本は戦後あれだけの復興を遂げ、経済的にも社会

的にもこれだけ安定しているのにも拘わらず、なぜ児童・生徒の自殺や不登校の率が高いのか」という校長からの問いがあった。日本の学校教育について熟知していたことには驚いた。

イングラテラ校では授業参観と校長との話を主として行った。当校はイギリスの学校と同じカリキュラムで行うため、英語は上達が早い。他教科特に地理、歴史等はコロンビアに即していない。正に国際的なエリート養成校である。授業は全て英語であり、教科書も英国直輸入のものを使用していた。レベルも非常に高いが休み時間などの会話はスペイン語であった。教師自身もエリート意識が強いが、研究熱心でもある。余りにも大きな学校であるためか、教職員間の連携、共通理解、日程調整等の面で難しいようだ。日本人学校としてはこの学校と日本の文化紹介を4、5年生を中心に長年にわたって行ってきたが、他学年からなぜ私たちは参加できないのか等の不満もあるようである。いずれにしても日本文化に対する関心は高いものがある。昨年は外務省の外国人小中学校教師文化交流派遣事業にこの学校から1名を派遣教師として推薦した。

5. 多言語学習の事態を見て

中南米はブラジルを除き、スペイン語圏であるため、国境を超えての労働が盛んである。また、民族的にも混血が多く、宗教的価値観もほぼ同一である。また、北米やヨーロッパへの出稼者も多くいるため、生活そのものが日本で言われている国際理解そのものであると思われる。現在北米の沿岸沿い大都市ではスペイン語で用が足りる状況にある。最近では残念であるが、日本語を学ぶ者が激減し中国人の進出もあつてか中国語を学ぶ者が倍増している。書店にも中国語関係の教材が増えてきている。(英語にしる、他言語にしる街中でスペイン語以外の言語をあまり聞くことはない。)

レナートデスカルテス校では基礎・基本に力点が置かれ、他言語教育や国際理解は行われているが、児童・生徒用の教科書は見あたらなかった。

多くの公立、私立校に共通するものとしてレベルの差こそあれ、小学校低学年からの英語指導が上げられる。英語指導の義務化は数年前からであるため、成果の程はこれからだと思われるが、今後英語能力が向上することは確実であると思われる。特に私立校での教科書は英米の輸入品が使われており、内容は高度である。また、学習意欲も高い。高校では哲学書を教科書として使用しているところもある。指導法は日本との差はあまり感じられなかったが、宿題の量は日本と比較して圧倒的に多い。

スペイン語はロマンス語系であるが、英語にも文法的、語彙的に共通する部分が多く、日本人が英語を学ぶよりも容易であると考えられる。また、英語学習が児童・生徒にとって将来の生活と直結する機会が多く見られるための日本との学習意欲の差は歴然である。また、公立校では英語の他にフランス語を必修としているところもあるため、複数言語獲得熱も高い。特にヨーロッパからの移民も多いことと、スペイン語が同じロマンス言語系ということもあって、生活必要上スペイン語をベースにして英語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語の組み合わせで、2～3言語を操る者もいる。中高校段階で英語と他言語を選択できる環境も整っている。

6. 日本との言語使用意識の違い

上述のように他言語教育が盛んであるが、それは、母語教育が徹底された上での話である。日常的にいかにも他言語を操ることができて日本のように母語と英語を混ぜて会話することはほとんど無い。母語話者において他言語は相手が他言語に限定される場合にのみ使用されている。

この実態を見るにつけ、私の疑問は、日本語の奥深さ、美しさなせもっと世界に広がっていかないのか。私たち自身が日本語をもっと大切に、世界に紹介する努力が必要であると強く感じた。

7. おわりに

コロンビアに3年間滞在し、いろいろなことを体験した。確かに所得格差は激しいし、道路や橋などの社会基盤の整備が遅れていたり、犯罪率が高かったり、社会的モラルの低さが目につく場合もある。しかし、施設、設備、経済的等の学校間格差がいかにあろうとも総じて子ども達一人ひとりの学習意欲は旺盛である。また、教師の生徒に対する情熱は経済的に貧しい地区の方が強いという印象を持った。文化面に関しては情報は十分ではないものの日本に対する興味関心が非常に強く、日本に是非行ってみたいという生徒が多かった。今後、経済的關係にのみ偏ることなく更なる文化交流推進の必要性を感じた。